

## O-4-08

### 国際活動におけるコミュニティヘルス専門分野研究会設立に向けて (第1報)

日本赤十字社和歌山医療センター 国際医療救援部<sup>1)</sup>、  
姫路赤十字病院 医療社会事業部<sup>2)</sup>、日本赤十字九州国際看護大学 特任講師<sup>3)</sup>、  
日赤医療センター 国際医療救援部<sup>4)</sup>、大阪赤十字看護専門学校 専任教師<sup>5)</sup>、  
名古屋第二赤十字病院 国際医療救援部<sup>6)</sup>、熊本赤十字病院 国際医療救援部<sup>7)</sup>、  
福岡赤十字病院 看護部<sup>8)</sup>、日本赤十字社 国際部 開発協力課<sup>9)</sup>

○吉田千有紀<sup>1)</sup>、高原 美貴<sup>2)</sup>、菅原 直子<sup>3)</sup>、苔米地則子<sup>4)</sup>、  
池田 載子<sup>5)</sup>、関塚 美穂<sup>6)</sup>、今村 尚美<sup>7)</sup>、橋本 香織<sup>8)</sup>、  
大津 聡子<sup>1)</sup>、丸山 嘉一<sup>4)</sup>、玉井 温子<sup>9)</sup>、辻 佳輝<sup>9)</sup>

背景：国際救済活動において、コミュニティヘルス分野での一定の派遣経験と専門性を持つ要員の育成は重要であり、その専門性は、国際赤十字の目指す地域レジリエンス強化の取り組みの中で、国際赤十字および国連の目指す持続可能な開発目標 (SDGs) 達成に貢献することが期待される。国際救済拠点病院では、平成14年から熱帯医学研修 (和歌山)、平成25年よりコミュニティヘルス勉強会、国際保健セミナー (名古屋、東京、和歌山) が企画され、大学および研究所関係者、国際救済要員等を講師とし、定期的に開催されている。平成29年5月、本研究会メンバーの選出が行われ第一回研究会が日赤本社で開催された。研究会目的：国際赤十字の保健事業に精通した専門性の高い人材の育成、日赤ナレッジ・マネジメントの充実化等を通して、国際赤十字保健事業への参画、日赤の関わる保健事業への技術的助言、国際赤十字への提言に関わる。活動方針：日赤本社および研究会メンバー間での課題と目的を共有し、長期的なビジョンとともに、その達成に向けて次の分野において活動を開始する。1. 初派遣要員への技術的・精神的支援 2. 日赤コミュニティヘルス事業への技術的助言 3. 主に国際赤十字が主催する会議等への出席と内容のフィードバック 活動成果については、第2報で報告する。

## O-4-10

### 「看護師のためのスタディツアー」の開催

大阪赤十字病院 国際医療救援部<sup>1)</sup>、武蔵野赤十字病院 看護部<sup>2)</sup>、  
大阪赤十字病院 看護部<sup>3)</sup>

○李 壽陽<sup>1)</sup>、渋谷美奈子<sup>2)</sup>、伊藤万祐子<sup>3)</sup>、池田 載子<sup>1)</sup>、  
中出 雅治<sup>1)</sup>

大阪赤十字病院国際医療救援部では平成27年度以降の事業計画書に「看護師のための海外スタディツアー」を盛り込み、初年度にはウガンダ共和国で、平成28年度にはフィリピン共和国で同ツアーをそれぞれ開催した。本ツアーの主な開催目的は、国外での看護の実践の場を実際に見聞する機会を日本赤十字社内外の若手看護師に提供するとともに、日本赤十字社の国際活動について周知を図ることである。国際医療救済事業拠点病院としての役割を担う当院の活動の一環として開催された本ツアーを振り返り、今後の開催に向けた取り組みを紹介する。初めての試みでは、日本赤十字社の当時の病院支援事業先であったウガンダ共和国アゴゲ県アンゴソリ医師記念病院へ当院シニア看護師の引率のもとスタディツアー参加者4名を二週間に渡り派遣した。2度目の開催時には、台風復興支援事業の一環で地域保健分野を展開していたフィリピン共和国セブ島ゴゴ市スタディツアー参加者6名および当院シニア看護師を10日間派遣した。国内で病院に勤務する看護職にとって、地域保健よりも病院が自身の普段の業務と直結し比較しやすいのではないかと懸念が事前調整段階にはあったが、いずれのスタディツアーにも参加人数を超える応募があり、スタディツアー実施後のアンケートでは参加者から絶えず好評を得た。過去3度の開催経験を踏まえ、早期から旅行者と調整するなど、当院では今年度のスタディツアー開催に向けた取り組みを始めている。派遣先や現地での活動内容等において特色を持たせることで他団体の実施するスタディツアーと色分けをしながら、参加者の安全および参加費用について引き続き検討を重ねている。

## O-4-12

### 看護補助者のチームワーク強化に向けたリフレクションの活用

旭川赤十字病院 看護部

○宮本ひろみ、寺沢ひとみ、安藤 瑛子、川合恵理子、吉岡 瑞子、  
桜井 美貴

はじめに：当院看護部では平成22年よりリフレクションを導入し、当病棟においても月1回実施している。当初は看護師のみで開始したが、平成26年より師長の支援を得ながら看護補助者 (以下補助者) も参加している。目的：平成28年4月当病棟では補助者4名のうち2名の異動があった。異動者が思いや悩みを自由に話す場を設定し、自己を振り返る事で成長に繋がり、補助者間のチームワークを強化する事を目的にリフレクションを実施した。取組み：補助者4名がリフレクションシートを使用し、6月、9月、1月に1時間のリフレクションを行った。実施後シートの内容を師長へ報告し助言を受けた。結果・考察：6月のリフレクションでは、異動者に業務への不安や自信のなさが見られた。業務の複雑さや時間の把握不足による事に気づき、マニュアルの作成や業務の組み立ての準備、時間意識を持つなどの新たな手掛かりを得られていた。フォロー側も不安を受け止め、共に振り返りを継続する必要性を認識した。9月では業務の慣れから報告・連絡・相談の不足があり、依存や受け身になっている自分に気づき、報告・連絡・相談の重要性を再認識できていた。また補助者間でも良好なコミュニケーションができてこそ、チームワークは発揮できる事を再確認した。1月では異動者は業務の得意・不得意に気づく事ができ、不得意な業務に対しての短期目標設定の必要性が理解できていた。リフレクションで他者との対話により自分の傾向が見え、フォロー助手の問いかけにより解決の為の手掛かりを得られていた。支援する補助者も思いを共有できチームワークの強化に繋がっていた。課題：今回は異動者が語り手となったが、チームワーク強化には他の補助者が語り手となり、リフレクションを継続していきたい。

## O-4-09

### 次世代の国際医療救済要員育成への取り組みについて

日本赤十字社和歌山医療センター 薬剤部

○榊 本亜澄香、小笠原佑子、大谷 香織、平田こずえ、  
久保明日香、今村 広実、中西 英登、北口 智彦、畑下真守美、  
吉田千有紀、古宮 伸洋、大津 聡子、藪本 充雄

はじめに：当センターでは1985年にエチオピアへの派遣を最初に、全国に5箇所ある国際医療救済拠点病院の1施設として、今まで述べ145人の職員を派遣してきた。毎年、赤十字の国際救済活動を志す入職者は多くいるが、実際に派遣要員として登録されるまでに至らないことが多く、結果として慢性的な次世代要員不足に陥っている。この状況を打破するため「和歌山から世界へ」を合言葉に、当センター国際医療救済部で新たな取り組みを始めた。活動状況：受講者の目録を意識した内容で年間計画を作成し、月1回の頻度で勉強会「CIRCLE<sup>2)</sup>」を開催。国際活動の経験年数の浅い要員が中心となり自主的に企画運営を行う。派遣要員の活動報告や研修受講報告など、毎月異なる内容を取り上げている。当センター看護部の理念でもある、「和を大切に」を標語に、参加者同士や既要員が繋がることから始めている。参加者の職種は多岐にわたり、医師、薬剤師、看護師、主事や看護学生が参加している。課題と展望：この取り組みは、次世代の国際医療救済要員育成の自己研鑽の場を作ることを目的とする。今後の課題としては次の2点がある。1. 国際救済活動に参加する強い意志と行動力を持つ人材の発掘と育成を目指す。2. 派遣までの道のりを支援し、1人でも多くの派遣機会を作る。190の国と地域で活動する国際赤十字・赤新月運動の一員として、継続して人的貢献を行う。

<sup>1)</sup>2017年5月31日現在

<sup>2)</sup>「Circle of International Red Cross Candidates Learning Experiences」の略で、将来国際赤十字の一員として活動を希望する職員や、派遣経験者がお互いの体験や知識共有を目的としている。

## O-4-11

### 看護補助者による安全な移送

#### ー具体的な事例を用いた体験型研修ー

武蔵野赤十字病院 看護部

○市石 和美、小川 圭子、織田 幸恵、黒川美知代、末永 裕代、  
梅野 直美、若林 稲美

【背景・目的】看護師等が専門性を必要とする業務に専念するために、看護補助者の効果的活用が重要となっている。当院では、看護補助者であるクラーク・看護助手・介護職員の業務範囲を職務規定で明確にし、役割発揮をめざしている。その一貫として、全看護補助者が携わる移送業務に注目し、患者の安全確保と看護補助者が安心して業務を実施するための教育を検討した。【方法】当院の看護補助者に意識調査を行った結果、伝達内容や判断の違いと医療行為中の状況に不安があるとわかった。また、看護補助者研修は知識学習が中心で技術習得は経験知やOJTであったため、個人差が予測された。そこで、看護補助者の移送業務基準と手順を整備し、事例による応用研修を企画・実施した。対象者は、医療行為がある患者の移送経験者で、医療機器研修受講済のクラークとした。内容は、意思疎通困難でドレーン挿入中・酸素使用中患者の移送方法を主体的に考え実施する参加型で行い、研修中の反応とアンケート結果を考察した。本報告では、個人が特定されないよう配慮し対象者に了承を得た。【結果・考察】事例を活用した基準・手順の研修は、基礎知識をもとに具体的行動の言語化を行ったため、全員が留意点を理解し実践に役立って答えた。医療機器の使い方・移送時の留意点等、1つ1つを基本通りに実施できても、認知機能の低下や医療行為がある患者の移送には配慮が必要であり、体験型研修は技術習得に有効であった。今後は、看護補助者の経歴や習得状況に合わせた課題に応じて、安心して業務が遂行できるように計画している。また、業務を依頼する看護師の意識も課題となった。

## O-4-13

### 看護補助者のリフレクション体験

仙台赤十字病院 看護部 看護補助者<sup>1)</sup>、仙台赤十字病院 看護部<sup>2)</sup>

○小野寺敬子<sup>1)</sup>、荒川 京子<sup>1)</sup>、加藤 千恵<sup>2)</sup>

【はじめに】「リフレクション」は自らの経験を振り返り、他者の意見を聞きながら「状況との対話」をすることによって自己に向き合い、そこから得たものを次に活かす過程である。今回、医療スタッフの一員として看護職員の補助業務を担う看護補助者の、資質の向上を目指して開催された看護補助者リフレクションを体験した。【看護補助者リフレクションの実際】研修教育担当の看護師長によるリフレクションについての講義を受講後、リフレクションを体験した。看護補助者6名から7名のグループに看護副部長または看護師長1名がファシリテーターとして参加した。「語り手」が「語り手」を話し、「語り手」以外の看護補助者が「聴き手」となり、質問をしながら「語り手」の「気がかりなこと」について「対話」を重ねた。リフレクションを通しての感想は「その経験が今の自分にとっては鍛えられた時間だったと語りながら気づいた」[体験の全てを話したのは初めてであったが話し終えてすっきりした] [結論や答えは出なくても、今できることをしてという気持ちになった] [受け止められながら感じたことをフィードバックされることが心地よかった] などであった。リフレクション体験の今後の活用については「経験を修正し積み重ねて患者家族との関わり場面などに活かしていくこと」[心身の調子によって他者からの言葉の受け止め方が変わることを理解していくこと] [それぞれ違いを受け止めること] [丁寧に聞く姿勢を持ち続けること]などがあげられた。看護補助者同士の信頼関係を基に対話がなされ、学びを深めることができた。【今後の課題】看護補助者が医療スタッフの一員として共に成長し続けられるよう、積極的なリフレクションを継続していくことが課題である。